

ジェームズの物語

James's story

from Insights in Space p.14

私が、初めてデイビッド・グローブがクリーン・アプローチを行うところを目にしたのは、一九九三年に行われたセミナーでのことでした。そのセミナーで、彼は、クライアント二人の相手を同時にしていました。つまり、一人目のクライアントに質問をいくつか問いかけ、二人目のクライアントの方を向き…と、彼は二人のクライアントの間を行ったり来たりしていたのです。

私はそれまで、クリーンランゲージという言葉聞いたこともなければ、似たようなものを見たこともありませんでした。それで、私はそこで何が起きているのかはわかりませんでした。けれど、特別なことが起きているという感覚があったのです。私は戸惑い、そして魅了されました。

その一年半後、私は再びデイビッドのワークを観察したり、彼から耳慣れない質問の数々を問いかけられたりする体験の機会がありました。その時にもまだ、デイビッドが何をしているのかが。私にはさっぱりわかりませんでした。ですが、ペニー・トンピキンスと私には「（彼が何をしているかを）説明しなければならぬ」ことだけはわかったのです。そして、そのベストな方法は、私たちが持つ神経言語プログラミング(NLP)の技術を使って、彼が持つ知識をモデル化することだということも。

私たちは、デイビッドのモデリングに一年はかかるだろうと考えていました。しかし、彼が次々と発明を繰り出し、自分たちが生涯にわたるモデリング・プロジェクトに関わることになるのは、その時、全く気づいていませんでした。

私とペニーは、デイビッドが一九九三年までに行った研究を一般化したモデルを、一冊の本にまとめました。しかし、その本が出版されてから二年と経たないうちに、デイビッドは大きな革新的飛躍を遂げました。そして、彼の研究は大きく方向転換することになったのです。

二〇〇二年四月。デイビッドが、英国での初開催となるワークショップ中、最新の革新技術「クリーン・スペース」のベールをはぎ取った時のことを、私は今でもはっきり覚えています。意外なことに、普段はとても自信に満ちていた彼が、その時は少し緊張しているように見えました。そして、私たちの意見を聞きたがったのです。「まずは、自分たちや他の人達と試してみないといけない」と、私たちは伝えました。

ジェームズのお話

James's story

from Insights in Space p.14

数週間後、私たちのところに滞在するためにやってきたデイビッドが真っ先に口にした言葉は「それで、どう思う？」でした。ペニーは「これは長続きすると思うわ」と答えました。

彼が大きな方向転換をしたことに、その時点では誰も気づきませんでした。

デイビッドは「アイデアを追い求め、アイデアと格闘する」とよく言っていました。その後の人生の残り六年間、デイビッドは、この発想を熱心に追求し続けました。そして、彼が「エマージェント・ナレッジ（創発的知識/Emergent Knowledge）」と呼んだ一連のプロセスを生み出すことを追い求めました。

「genius（天才）」と呼ばれる人は多くいます。ですが、デイビッド・グローブほどその称号にふさわしい人物はいません。

彼は語源学を愛していました。「genius（天才）」のラテン語の語源は「begat（出産、創造などを意味する）」です。geniusは、多くの手法を生み出した彼の才能を表す言葉として完璧なメタファーではないかと思います。25年に及んだデイビッドの研究は、その豊かさを掘り起こそうとする人々に深い知恵を与えてきました。

この本は、彼の成果の一部です。

マリアンの物語

Marian's story

from Insights in Space p.15

ジェームズはデイビッド・グローブと直接関わり、このワーク（デイビッドの発明した手法）に携わるようになりましたが、私自身は、そのほとんどをジェームズとペニーから学びました。クリーンラングーとシンボリック・モデリングと私の初めての出会いには、一九九九年にNLPのカンファレンスで行われたジェームズの「バインドとダブル・バインド」の講演でした。私はクライアント役に立候補し、そして、その時体験したセッションが、人生の新しい段階の方向性を決めたのです。そのセッションを通じて知った自分自身の姿に驚くばかりでした。それで、ジェームズが実演していた技術の使い方を学ぶことに決めたのです。

クリーンスペースと私の最初の出会いもまた、ペニーとジェームズを通じてのことでした。彼らが開くクリーンラングーのワークショップに、三、四度目の参加をしていた時のことでした。最終日、ペニーとジェームズは、大きなホールを借り切って、参加者達にクリーンスペースを体験させてくれました。

ホールの床は、ネットボールのコートにつける印を使った境界線で区切られていました。参加者達は、ペアになり、それぞれのペアが、コートの半分を使用してワークに取り組みました。

その頃すでに私は、クリーンラングーという「びっくりするような結果を頻繁にもたらす、少々変わった手法」については学んでいました。それでも「個々の空間が、全く異なることを知っていること」を発見したあの日の驚きを、今でも思い出すことができます。

コートの境界線を尊重し、他の参加者の空間に立ち入らないようにすることを学ぶ中で、「神聖な空間 (sacred space) 」*という言葉が、私にとって新たな意味を持つようになりました。

マリアンの物語

Marian's story

from Insights in Space p.15

それ以来、私は、クリーンランゲージやクリーンスペースをたくさんの人に教え、また、自著『コーチのためのクリーンなアプローチ』を書きました。本の執筆中、ジェームズは多くの有益なフィードバックをくれました。だから、彼が「クリーンスペースについて一緒に本を書かないか?」と言った時、私はすぐに「ぜひ!」と答えました。そして、私たちは、何日間も、付箋に囲まれた楽しい時間を過ごしました。この本の中にあるコンセプト全ては、そのどこかの時点で、壁や床、テーブル上の付箋に書かれていたものです。また、そこには、この中に掲載しきれなかったアイデアもいくつかありました。

課題の一つは、「本」という限られた枠の中で、とても動きの多い「空間的なプロセス」をどうやって表現するかでした。

クリーンスペースを理解する一番の方法は体験することだということは分かっています。それで、次のページに短いバージョンのワークをご用意しました。付箋（または小さな紙）を用意して、ぜひやってみてください。簡単なワークを通じて、クリーンスペースのプロセスと、あなたが考えたいテーマの両方について新たな気づきを得られるだろうと思います。